

文学研究とデジタル・ヒューマニティーズ

(司会・講師) 中央大学教授 橋本 健広
(講師) 国立国語研究所助教 宮川 創
(講師) 福岡大学講師 船田佐央子
(講師) 人文情報学研究所主席研究員 永崎 研宣

企画概要

本シンポジウムは、文学研究者が DH を利用するための精読と遠読の接続について考えることを目的とした。

文学研究は初期のころからいわゆる科学的な研究方法を模索してきたといえる。現在ではコンピュータの普及とデジタル・リテラシーの向上そしてデジタル・アーカイブの拡充によって、多くの文学研究者が科学技術の恩恵を受けた研究を行っている。

デジタル・ヒューマニティーズ (以下 DH) は、文学テキストや歴史・絵画等の各種資料をデジタル化しコンピュータ上で閲覧、検索、分析を可能にした、特に 1980 年代以降活発になった研究分野であり、人文学研究に新しい視点をもたらした。一方で、DH には固有の情報学的な理論・方法が多く、従来の文学研究との親和性を模索する必要があるといえる。文学研究者は DH をどのように利用すべきかという問題は、英米文学研究者にとって避けて通れない課題である。従来の文学研究の基本的な方法である精読と、DH で取り上げられることの多い遠読について、概要を概観するとともに各分野の専門家による実例を交えた説明を通して、精読と遠読が交差する DH の取組について考察した。

最初の発表は、橋本による精読と遠読の定義、DH におけるテキスト分析研究とイギリス・ロマン派研究における DH 研究の研究動向、遠読を利用したテキストの精読の実例である。橋本による発表以降、宮川創講師による古代末期キリスト教文学における間テキスト性へのデジタル・ヒューマニティーズ的アプローチ、船田佐央子講師による「アナログ」と「デジタル」の観点からみるディケンズの言語・文体研究、永崎研宣講師による人文学におけるデジタル研究環境のグローバル化と英文学研究への期待が述べられた。詳細は各講師のプロシーディングスを参照されたい。遠読の手法を用いて精読へとつなげる各分野の手法は、イギリス文学という枠を超えて、文学研究全般の視座からテキストへのアプローチを考察するものである。また DH は様々な学問分野を包摂する幅広い研究分野であり、英米文学はその一つに過ぎない。本シンポジウムでは、海外および日本の DH における英米文学研究の位置や、異なる学問分野を取り入れて研究する際の取り組み方を確認するなど、精読と遠読の方法を通して DH と英米文学の両分野における交差の可能性を模索した。

イギリス文学における精読と遠読：デジタル・ヒューマニティーズ研究の方法論

シンポジウム全体の内容に鑑み、はじめに概説的な知識を共有するため、イギリス文学における精読と DH における遠読の定義、DH 研究の側からみた文学研究の研究動向、英文学研究の側からみたイギリス・ロマン派文学における DH 研究の研究動向を確認し、DH を用いたイギリス文学のテキスト分析の事例を紹介した。

精読は、テキストを精緻に読むという行為であり、「テキストの意味論的および形式的特徴に着目し、かつ多くの場合そうしたテキストの特徴に複雑な統一と目的を見出すテキストへのアプローチ」(*Poetry and Poetics* 268)である。これに対し、遠読はテキストの語彙や周辺情報などを用いて、データから特徴的な傾向を選び出す読みであり、テキストを総体として捉えて俯瞰し、ある規則性や方向性を見出すものである(橋本 47; モレットティ 65-90; Rockwell and Sinclair 116)。両者は、例えば T.S.エリオットが詩人の感受性は 17 世紀に分裂したと推測するなど(308)、コンピュータが存在するはるか以前から文学研究者の志向として存在していた。

DH の遠読の研究は手法面からとらえると、単語の数を数えるか、関連情報を利用するか(Wilkins 12-15)、あるいは単語埋め込みや大規模言語モデルといった手法に代表される語の意味や文脈を考慮するか否かといった分け方ができる。また内容面からみると、基盤となるデジタル・アーカイブ、作者同定、ネットワーク分析、語彙研究、テキスト分析研究、人文地理学、反省的批評、レビュー論文といった分け方ができる。例えば、ゲーテの初期の作品がのちの作品に影響を与え続けたという推測を、語彙の分布を計算し可視化することで量的に示したアンドリュー・パイパーとマーク・アルジー・ヒューイットの研究や(155-84)、意識の流れが英米圏

から日本文学に伝播する様子を文体的特徴から可視化したホイット・ロングの研究などがある(235-89)。

2022年に *Wordsworth Circle* で特集が組まれるなど、英文学における DH 研究は近年盛んである。特にイギリス・ロマン派研究を中心にみると、二つの点が特徴的である。ひとつは、内容面から分けた場合、DH の遠読研究の分け方に加えて、メディア論や哲学を組み合わせた研究がみられることである。例えば、ヨーヘイ・イガラシは、速記者としてのコールリッジ、官僚としてのワーズワス、社会的ネットワークの中のシェリー、キーツと電信の関係を示して、ロマン派時代のコミュニケーションの願望を示した(168)。また語彙研究の領域の層が厚く、例えば中川憲は、ワーズワスの名詞、動詞、形容詞、前置詞等の使用法の特異性を調べ、心的世界と外部の自然をつなげる独特な言葉の用法を見出した(125-27)。英文学における語彙研究は、言語学に根差し、遠読と精読が調和して融合しており、遠読と精読を接続する一つのモデルとみることができる。

最後に、実際のテキスト分析の事例として、橋本によるワーズワスの『辺境者たち』とコールリッジの『オソリオ』の影響の分析例を示した。両テキストを細かい行のまとまりに分けて類似度を出すことで、同じ語句が出現する頻度の高い箇所を見出し、類似度が高い場合テキストが互いに影響しあうと仮定して、精読につなげるものである。

本発表では、精読と遠読の接続に、語彙研究におけるような、文学上の問題意識から出発し、モデルを作つて量的に分析し、またテキストに戻つて精読につなげるという読解の一つの可能性を示した。遠読はそれ自体でも一つの長い時間軸の方向性を示しうる点で有益であるが(Underwood 104-10)、英米文学の研究に資する方法を求めれば、遠読を用いて精読を行うなど両者を融合する方法を模索する必要があるだろう。本発表およびシンポジウムは、そのような学際的な研究を導く礎として今後の研究の発展に寄与することを試みた。

Works Cited

- Eliot, T. S. "The Metaphysical Poets." *English Critical Texts: 16th Century to 20th Century*. Edited by D. J. Enright and Ernest De Chickera, Clarendon P, 1962, pp. 302-311. [T. S. エリオット. 「形而上詩人」『文芸批評論』矢本貞幹, 岩波, 1938, pp. 123-42.]
- 橋本, 健広. 「情報と文学」『国際情報学入門』中央大学国際情報学部編, ミネルヴァ書房, 2020, pp. 44-59.
- Hashimoto, Takehiro. "Osorio and The Borderers: The Poetic Dialogue in Quantitative Analysis." Wordsworth Summer Conference 2022, Rydal Hall, August 15th, 2022.
- Igarashi, Yohei. *The Connected Condition: Romanticism and the Dream of Communication*. Stanford UP, 2020.
- ロング, ホイト. 『数の値打ち: グローバル情報化時代に日本文学を読む』秋草俊一郎, 他訳, フィルムアート社, 2023.
- モレッティ, フランコ. 『遠読: 世界文学システムへの挑戦』秋草俊一郎, 他訳, みすず書房, 2016.
- Nakagawa, Ken. *Wordsworth's Vocabulary in the Prelude*. Keisuisha, 2018.
- Piper, Andrew and Mark Algee-Hewitt. "The Werther Effect I: Goethe, Objecthood, and the Handling of Knowledge." *Distant Readings: Topologies of German Culture in the Long Nineteenth Century*. Edited by Matt Erlin and Lynn Tatlock, Camden House, 2014, pp. 155-184.
- The Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*. Edited by Roland Greene, et al, 4th ed., Princeton UP, 2012
- Rockwell, Geoffrey, and Stéfan Sinclair. *Hermeneutica: Computer-Assisted Interpretation in the Humanities*. MIT Press, 2016.
- Underwood, Ted. *Distant Horizons: Digital Evidence and Literary Change*. U of Chicago P, 2019.
- Wilkins, Matthew. "Digital Humanities and its Application in the Study of Literature and Culture." *Comparative Literature*, vol. 67, no. 1, 2015, pp. 11-20. <https://doi.org/10.1215/00104124-2861911>.
- The Wordsworth Circle*, vol. 53, no. 3, 2022.